

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

①

夫としと 小泉



■昭夫とわたし

村上昭夫が押しも押されもせぬ詩人として脚光を浴びたのは、昭和四十三年三月、詩集「動物哀歌」がH氏賞を受賞したその瞬間のことだった。H氏賞とは、

現代詩人協会が毎年度優れた新人に与える最高の勲章だったから、昭夫の名は全国的に鳴り響き、NHKの「時の人」にも登場するほどだった。

しかしわたしは、昭夫の受賞に気が付くこともなく

日動火災東京地区の営業マンとして、東京中を駆けずり回っていた。昭和四十五年に会社を辞め盛岡にUターンしたときには、昭夫が病死して二年たっていた。

昭夫とわたしは同じ中学のクラスメートでありながら、いつもすれ違っただけだった。昭夫は昭和二年一月五日、わたしは同年十一月二十日の生まれだ。小学校入学の学齢は四月を起点とするので、わたしの中学入学は昭夫の一年

後輩だった。昭夫がパラチフスで留年しなかったなら、決して机を並べて授業を受けることはなかったが、留年した昭夫と三年生の時に同級となった。

それから戦時体制下の中学生生活を三年間共にしたが、在学中の昭夫とは、さして交際もなく過ごした。五年生のとき学徒動員で鶴見の軍需工場に出動中のある日撮影した記念写真に、たまたま昭夫とわたしは隣り合って写っている一葉が唯一のアリバイだった。

昭夫が敗戦の満州での苦難生活から帰国して、盛岡郵便局事務官となったころ、今のテレビ岩手の場所にあった料亭秀清閣で開かれた同級会の記念写真でも昭夫はわたしのすぐ後ろで白い歯を見せて笑っていた。

昭夫が結核で下米内の岩手サナトリウムに入院し闘病していたとき、わたしは釜石で高校教師だったし、昭夫が郵便局を病氣退職後、詩人として活発に詩作を開始したころ、わたしは教師を辞め上京したので、生前の詩人昭夫と語り合う時間を持たなかった。そうした悔しき、寂しさを埋めるために、わたしは昭夫を書いてゆきたいのです。

(毎週木曜日掲載)

鶴

あれが鶴だったのか

今になって思えばはっきりと言える

私は失望していたのだ

日毎の餌にことかかない檻のなかで
優雅な姿を見せていた鶴のことを

私は随分長い間

思い違いもしていたのだ

豊かな陽光のもとに

あたかもそれが吉祥のしるしなのだ信じられて
舞いあがり舞いおりしている鶴のことを

だがそのいずれの時も鶴は

それ等の認識のはるかな外を

羽もたわなに折れそうになりながら飛んでいたのだ
降ることもふりむくことも

引返すこともならない永劫に荒れる吹雪のなかを

あの胸をつつ鶴の声は

そこから聞こえていたのだ



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

②

小泉とし夫

■学友の縁に薄く

少年期の昭夫は、父の転勤により同じ場所に定住できなかつた。そつという事情が学校生活にどこか影をおとしていて、学友の縁が薄かつたようにみえる。

昭和二年（一九二七）一月五日に、昭夫は母タマカの家である東磐井郡大原町（現大東町）で生まれ、まもなく父三好の生家の気仙郡矢作村に移った。父は遠野区裁判所高田出張所に勤務していた。在住一年の

のち、昭和三年に父は一関

区裁判所藤沢出張所長となつて、昭夫は矢作村から西磐井郡藤沢町に移住した。

やがて藤沢町立藤沢尋常小学校に入学したが、また父の転勤（遠野区裁判所盛出張所長）により、三学年の二学期より気仙郡盛町立盛尋常小学校の三年生に編入学した。

このよつに、小学校時代の生活がほぼ三力年ずつ二分された結果、学友の縁が薄くならざるを得なかつた

ものとみられる。

昭和四十七年にふくしのりゆき（『村上昭夫・作品と生涯』の著者）は、小学校時代の昭夫の消息をたずねて藤沢町や盛町を取材に訪れた。

昭夫が亡くなって四年後のこと、同級生たちは四十五歳の壮年者だつたとみられる。

しかし、藤沢町でも盛町でもかつての同級生から、ほとんど取材らしいものが得られなかつたと、ふくしは述べている。

それは岩手中学時代の昭夫についても同じことが言えるのではないか。昭夫は、昭和十四年三月に盛町立盛尋常小学校を卒業し、一関中学の受験に失敗して岩手中学に入学することになつた。

しかし、三学年のときパラチフスに罹り、三カ月間の休学により留年となり、一年あとに入学したわたしたちと三学年から共学することになった。なお従来年の譜では四学年で留年したとされているが、学籍簿により三学年だつたことが確認されたので修正してほしい。

（ついでに昭夫は中学でも三力年ずつ二分した学校生活をする）ことになり、学友の縁の薄さの原因となつた。（毎週木曜日掲載）

金色の鹿

金色の鹿を見た

金色の鹿を見たと言つても

誰もほんとうにはしてくれない

ほくが頼りにならない少年だつたから

ほくのなかの目立たない存在なのだから

誰もそつぽを向いては

足早に行つてしまつ

でもその山ならばたしかにある

みなが五葉山と呼ぶ山で

東は直きに太平洋で

広がる午前の雲を背に深く負いながら

あの鹿ほどの方向へ向つたのだらう

そのことをどのよつに説いたなら

ほくが分つてもりえるのだらう

鹿が死んでしまつと

ほくのなかの宝珠が死ぬといつ

言ひ伝え

ほくはそつぽを

夕風の便りのよつに聞いた善なるに

（詩集「動物哀歌」より）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

③

小泉とし夫

■少年昭夫の内面世界

小学時代の昭夫は、周囲からは内気でおとなしい子供とみられていた。だが、

昭夫の内面には、学友たちには見せなかつた鏡のように研ぎ澄まされた世界があつて、藤沢町や盛町の風土の映像が、原色のままずっと保存されていたのです。

詩稿ノート「荒野とポップ」に、「愛宕山の向う」
と題する草稿がある。昭和三十二年ごろの詩稿で、藤沢町での映像を刻む興味深い作品です。これが十年後に推しつされ『動物哀歌』に収録されているが、先駆

形の草稿の方が、幼児体験の原風景が実感されるのではないだろうか。

七つの時だつた
藤沢町を兵隊が通つてい

つた
幾十幾百と列が続き
近く支那を征伐するのだらう
と言つた

びっこをひき悲しそつに
うつむきながら
ふりむきませず

そして馬に乗つてふんぞりかえつてゐるのもいた
町のうしろは愛宕山
山の向うは何処なのか
私には分らなかつた

んだかとはつともなく大きな
もやもやした穴がありそ
うな気がした
兵隊達の列は続き

悲しそつにふりむきませ
ず
兵隊達は消えて行つた

(中略)

あれからもう
二十幾年も経つて
私は三十にもなるつと言
うのに

兵隊達は何処に消えたの
か
愛宕山の向うはなんだつ
たのか
今でも思い出せない

すずめ

すずめは撃たれたつていいのだ
捕まつたつていいのだ
威かされたつていいのだ

すずめ威しは一日いっぱいすずめを威かすし
なまりの弾は世界の暗い重い色だし
かすみの網はすずめを一度に百羽も捕るのだ
だが誰もすずめを
消しさるわけにはゆかない
すずめを撃つ人も
すずめを捕らえる人も
すずめをたわいもなく威かす人も
すずめを
失つわけにはゆかないのだ

この詩の原風景は、七歳の昭夫の網膜にやきついてゐる残像である。「兵隊達が消えて行つた」のは、昭和六年の満州事変と同十一年の二・二六事件の中間点にある昭和九年のできごとだつた。やがて同十二年に日中戦争が勃発する。ザックザックと軍靴を響かせて、愛宕山へ向かう兵隊の列は、大陸への侵攻を予感させ、小学二年の昭夫の内面を揺るがせ「その夜の影のように」おびえさせたのでした。(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

④

小泉とし夫

■橋をわたる兄弟

昭夫には和夫（昭和四年生）、貞夫（同七年）達夫（同十年）、成夫（しげお、同十六年）という四人の弟がいた。父は裁判所勤めの官吏にしてはシャレタ発想で、子供たちの名前を「ア・カ・サ・タ・ナ」の頭文字の順に命名したのである。

和夫と貞夫は、やんちゃで活発な弟だった。盛町の官舎の近くには広場があり、弟たちはここでゴロ野

球をして遊んでいると、昭夫は二階の窓からだまってそれを見守っていた。

昭夫は長兄として弟たちの世話をよくやき、生まれつきの達夫を背中におぶってお使いにも行った。野原や川原に弟たちを連れて遊びに行き、危険がないように注意をした。「兄ちゃんと一緒にいると、どんなときでも心強かったよ、弟たちは昭夫を信頼した。盛町時代に弟の和夫に養

子話があったときもそうだった。気仙には父の親戚が多く、そのなかに跡継ぎの欲しい家があって、この話にもちこまれたらしい。しかし養子を嫌がる和夫のため、昭夫はじつに大胆な作戦を実行して弟の窮地を救ったのだ。

それは親戚の伯父が和夫を迎えに訪れたときだった。昭夫はひそかに二階から和夫を脱出させ雲隠れさせてしまった。父も伯父も兄弟の絆の深さにつれたのか、養子の件は沙汰やみになったという。

雁の声

雁の声を聞いた

雁の渡ってゆく声は

あの涯のない宇宙の涯の深さと

おなじだ

私は治らない病気を持っているから

それで

雁の声が聞こえるのだ

治らない人の病いは

あの涯のない宇宙の涯の深さと

おなじだ

雁の渡ってゆく姿を

私なら見れると思う

雁のゆきつく先のところを

私なら知れると思う

雁をどこまで行って抱けるのは

私よりほかないのだと思う

雁の声を聞いたのだ

雁の一心に渡ってゆくあの声を

私は聞いたのだ

（詩集「動物哀歌」より）

この逸話は「橋をわたる兄弟」という詩の詩想につながっているのではないか。この詩は「日報文芸」（昭和32・10・1）の村野四郎選の作品だったが、『動物哀歌』には収録されてはいない。その一部を抄出してみる。

「橋をわたる兄弟を見た／その母をひとつにし／その父をひとつにし／朽ちた一本の丸木橋の上を／兄は弟を背負っていた／つかまっているんだよ／落ちちゃいけないんだよ」 「朽ちた一本の橋の上を／弟は兄にすがっていた」

最終二行は逸話の隠喩なのかも知れない。この詩に、村野四郎は「生」に対する深い意識があると指摘した。

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑤

小泉とし夫

■昭夫はチビだったか
昭夫が一関中学の受験を失敗し、私立岩手中学（現岩手高校）に入学したことを前にも書いたが、昭夫の唯一の評伝とみられる『村上昭夫・作品と生涯』（ふくしのりあき著・一九七二年）は次のように失敗の理由を詮索しています。

「岩手中学入学前に、一関中学を受けている。しか

し、体操の実技の試験において、百メートル位、土囊（どのう）を背負わせられて歩かせられたのであるが、背が小さくて土囊が地についてしまうのであった」と述べ、失敗要因を説明しているのです。

背負った「土囊が地につく」とは、かなりのチビという印象を与えるものだが、受験期の昭夫はそんなに背

が低かったのか。

そこで、昭夫が入学した岩手中学の学籍簿を閲覧させてもらい体格検査票を調べてみた。すると昭夫が入学した昭和十三年度の欄に「身長一三五㍍」とあったのです。ちなみに体重は二六キ、胸囲は八二㍍でした。

この「身長一三五㍍」は、はたしてチビといふべき数値なのか。

太陽にトンぼ

太陽にトンぼが飛んでいると
子供は黒点の乱れを見て言うのだ

私は黙ってしまっ
太陽にトンぼがいることは本当なのだから
私はなにも言えなくなってしまう
ほんとうはトンぼは

太陽だけではなく何処にでもいるのだ
銀色のすきとおる羽をきらめかせ
ルリのような目を輝かせながら
宇宙をいっぱい飛んでいるのだ

太陽にトンぼがいると子供は言うのだ

私は黙ってしまっ
私はある大事な日に
ある大事なものをこわしてしまったのだから
あれは黒点に過ぎないのだと

それから月には死んだ山があるばかりで
火星なら原始的なコケ類が
かろつじているだけなのだ
それだけしか言えないのだ

トンぼの見えなくなった私を
子供に覗かせるのは恐ろしいことなのだ
例えば暗い矮小な黒点と
死んだ山とコケ類しかなくなった私を

太陽にトンぼが飛んでいる
子供は太陽を見て言っているのだ
きらきら光る超次元の知恵で
まっすぐに太陽を見ているのだ

（詩集「動物哀歌」より）

『岩手近代教育史』第四巻の統計資料によれば、男子中学校生徒の身長が年度別の表になっているので、それをのぞいてみると、残念なことに戦後統計しか収録されていない。戦後最初の統計は昭和二十三年度のもので、この資料によると新制中学第一学年生徒の身長が全国平均一三五㍍、岩手平均一三五・八となっているのです。

この数値の意味はきわめて大きい。たとえ、昭和十四年と二十三年度との時差はあるが、戦時中と戦後初期の日本人の体位について、さほど差異があるとは考えにくいから、この数値は、昭夫の身長と対比できる数値だと思われれます。

すなわち、昭夫の一三五㍍という身長は、同じ年齢の全国平均と一致しているもので、決してチビではなく、日本人の平均の背丈だったことがわかる。

昭夫が一関中学受験の失敗を、「背負った土囊が地についた」背の低さに理由づけたことには疑問があるといえる。

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑥

小泉とし夫

■ 中学時代の孤独

盛町は岩手県の南端の、宮城県に隣接する大船渡湾の深い湾尻にあったから、盛岡へは汽車を乗り継いで、まる一日もかかるほど遠隔地でした。気仙地区から進学する中学校は、一関や黒沢尻の中学校が普通で、同郷の先輩、後輩に恵まれていて交友関係も親密だった。

昭夫も一関中学を目指したが、なにぶん学力不足のため不合格となったのです。公立中学を外せば、私

立中学しか受け入れてくれるところがなかったから、親せきもなく遙かな未知の異郷ではあったが盛岡市内の私立岩手中学（現岩手高校）に入学することになったのです。

幸い盛岡には、父の知人が銀行に勤めていた。仁王小路三十七番地に住む、盛町館下出身の佐々木守彦という人で、市内身元引受人になってくれました。昭夫は、父が昭和十六年に盛岡裁判所勤務となるまでの二年間を佐々木宅に下宿して

鴉

あの声は寂寥を食べて生きてきたのだ
誰でも一度は鴉だったことがあるのだ

人が死ぬと鴉が二羽何処かで死ぬのだと
隣りの部屋の老人が言った
あたかも七十年を生きてきて
その秘奥を始めてうちあけるように

鴉の食べる食物を何時か見た
道に捨てられているけどものの腑を
川を流れてゆく
腑のような血のかたまりを

だがそれ等のすべては
人が己れを他のいきもの達と区別する
高い知性や進歩する科学と
なんの変わりもないものなのだ、

鴉はそれを食べて生きてきたのだ
誰でも一度は鴉だったことがあるのだ

（詩集「動物哀歌」より）

通学したのです。

岩手中学は長町田圃（現長田町七の六〇）にあって、佐々木宅から徒歩で十数分くらいしかかからなかった。学校は大沢川原から現在地に移転し、新校舎は昭夫が入学するちょうど一年前の昭和十三年三月に竣工したばかりのモダンな校舎だった。

建築設計は東京駅や盛岡銀行（現岩銀中の橋支店）などの設計で有名な盛岡出身の工学博士・葛西万司の手になるものだったから、外観に特徴があった。

昭夫はピッカピカの校舎へ夢をふくらませて通ったが、やがて気仙出身の学友もなく、世話をやく先輩も不在で、まるで真空にある自身に気づきました。

岩手中学の生徒は県外を含め全県下から就学していたが、昭和五年の統計によると全校四百九十七人（一学年一五学年）のうち気仙郡からはわずか四人だけで、しかもその内訳をみると二年生一人、四年生一人、五年生二人で、一年と三年生の在籍者がゼロだったのです。

物静かで微笑を浮かべる童顔をみて、昭夫のなかに孤独の空洞が存在することを学友たちは知らなかった。（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑦

小泉とし夫

■子守歌が聞える

わたしもこの詩篇に出会うまで、昭夫がそんなに深い孤独に耐えていたとは思ってもみなかった。

それは『動物哀歌』の「子守唄」という詩の先駆形である習作だったので。習作は、詩稿ノート「荒野とポプラ」に「子守歌の中で」という表題で書かれています。確かに「子守唄」の方が余分な言葉を削りとり洗練されている

が、それだけに詩想の原風景を見えにくくしている。

それまで見落とされていた昭夫の悲痛な孤独の叫びが、習作「子守歌の中で」からびんびんと聞こえてきたのです。習作に目を走らせながら、この詩は中学時代のやりきれなかった孤独感をうたっていると実感されました。修辞シャツを着けていないハダカの肉声だからこそ、あのころの息づかいが伝わってくるのです。

遠くの、遠くの方から
ふるさとの声が
ぼら色の夕暮れの中に
すけて見えてくる

山があるんだ
そんなに高い山でもなく
川があるんだ
そんなに大きな川でもなく

それが子守歌の中で 続
いては
続いてゆく

海が匂っている 静かな
波だ

歩んで来た砂原が
さらさらと 緑色の波に
とけ込んでゆく

いつからか この子守歌
の匂い
貧しい生活の
立ちのぼる煙の中から
小ぢやかな
そして 遠い遠い匂い。

遠く気仙の町を恋つる十
三歳の孤独な少年が、下宿
の一室でほおづえをつき夕
暮れ空を眺めている構図が
透けてくる。その夕空のか
なたに、五葉山を望み、盛
川が流れ入る大船渡湾が幻
視され、海の匂(にお)い
まで漂う。そして耳の貝殻
にしみこんでいた郷愁の幻
聴が、この習作となったの
だろう。(毎週木曜日掲載)

鳩

鳩は住みつくな
あたえられた餌を食べて
そこに平和に住みつくな
使い鳩も土鳩にまじると土鳩になる
そのことが私を悲しませる
鳩は人に親し気によってきて
人の手から不安なく豆を食べる
鳩は仲のよい夫婦の見本にされて
時に人をうつらやましがらせたりする
そのことが私を悲しませる

鳩は使い鳥になって飛んでゆけ
鳩は荒野から次の荒野へ
鳩は荒野から次の荒野へ
自らの体をほろほろにひき裂きながら飛んでゆけ
鳩が使いをするのを私は思っ
鳩のいのちのことを私は思っ
鳩が天に昇ってゆくのを思っ
渦巻く星雲から次の星雲へ
その羽は今こそ痛ましくちぎれて裂け
その愛くるしい声は火に焼かれた塩のようになり
それでも一心に天を使いしてゆく姿を
あたかも
ゲヘナの火のよつに思っ

(詩集「動物哀歌」より)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑧

小泉とし夫

■雪が音もなく降る

詩稿ノート「荒野とポップ」のもう一つの草稿「雪の歌」も、五連十九行の草稿が推敲(すいこう)され十二行の定稿「雪」となっており、『動物哀歌』に収録されている。

しかし、素材さにもみれた習作「雪の歌」は、孤独な望郷少年の素顔が鮮明にのぞいて捨てがたい。

昭夫は夏や冬の休みになると、なげなしの小遣いを

はたいて弟たちに土産を買

い盛町の実家に飛んで帰省

したという。雪は、冬休み

帰省の子守唄だったのか。最初の二連に、窓の雪に傷

眠りは真白の絹より哀しい
ほつたいのだから 雪が傷にふれると
終わった善のピアノがなる
灰色の灯ではない
空を失った鳥の思い出であろ
鳥がくらのやみのように落ちてこないのは
雪のどこかに
明日の炎があるからだ

雪が音もなく降り始める

時 やわらかに匂うつたは子守唄なのだろう

リス

リスを見たことを

得意になって言うのではないか

枝から枝へ渡ったリスを見ただけで

その手は新しい棒をにぎり

その目はおさな児のように燃え

その口はまだ聞かなかった声をあげ

烈しく息さえ切らして追ったではないか

だがそれでもなお

リスはつかまらなかつたろう

リスは薄日のさす木の枝から次の木の枝へ

隠れては現われして捕え難い思惟のように

姿を消してしまつたろう

だから言っておく

私には分るのだ

リスは極く小さないきものなのだ

リスを追うのに

棒などふりまわすものではない

徒党をくんで追つものではない

リスは夜不思議な星がまたたく時刻に

素手でとらえるものなのだ

争いや疲れを癒した夜のてのひらに

やわらかくくだくものなのだ

いだいたならまた未知の明日のなかへ

さよふならと離してやるものなのだ

あのリスの目と

ふさふさした尾のなかに

隠し絵のような世界があるのだ

た 貧しい涙と共に凍りつい
遠い野火のような祈りの

歌 祈りが祈りである事を失

われない限り
降りやまぬ黒い雪

時 雪が音もなく解け始める
やわらかに匂うつのは子守

唄なのだろうか

河はたしかに

その時から流れ始めるの

だ

『動物哀歌』では、「音もなく降り始める雪は／空を見失った鳥のすすりなきだろつ」と第三連が二行にまとめられ、雪は鳥の「すすりなき」と化してしまつが、習作は自由に飛べない孤独な鳥の昭夫に、雪は祈りの歌だった。雪は「明日の希望の炎」で「くらやみのように」落ちないための支えでもあった。溶けた雪は「子守唄」となり孤独をつつんで流れる心の河だった。(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑨

小泉とし夫

■ざしき童子の印象

昭和十六年三月の異動で父が盛岡区裁判所に転勤となり、加賀野中道二十七番地に一家が住むことになった。この住所はのちに天神町二十七番地と改称される。昭夫も二年ぶりに家族と一緒にになり、弟たちに囲まれて孤独から解消された。その夏は天候不順で、県内各地に流行した腸チフスに感染して三方月も学業を休むことになった。三年の二期のことで、そのため昭夫は留年となった。留年した昭夫は一級下だ

Point

ねずみを苦しめてごらん
 そのため世界の半分は苦しむ
 ねずみに血を吐かしてごらん
 そのため世界の半分は血を吐く
 そのようにして
 一切のいきものをいじめてごらん
 そのために
 世界全体はふたつにさける

ふたつにさける世界のために
 私はせめて億年のちの人々に向って話そう
 ねずみは苦しむものだと
 ねずみは血をはくもののだと
 一匹のねずみが愛されない限り
 世界の半分は
 愛されないのだと

(詩集「動物哀歌」より)

在学中の昭夫はきわめて希薄な印象しか残していないのです。

昭夫の没後の同級会で、何度も昭夫の思い出を語るように呼び掛けてみたが「もの静かでもいつもニコニコしていたなあ」という類いの反応しか返ってこなかった。

ところが、とても不思議なことがある。

わたしたちの中学時代には、まだカメラが普及していなかったから、学校生活のスナップ写真は、そんなに多く撮られていない。いつだったか、同級会で各自の所有する学校生活のスナップ写真を持ち寄ったとき、点検してみると意外にもどの写真にも昭夫が写っていた。

クラスメイトの間にまじって微笑を浮かべた昭夫の童顔がのぞいているではないか。わたしたちは写真を点検しながら唾然としたのです。まるで『遠野物語』の「ざしき童子」のように怪訝(けげん)なことだった。

そのグループとは無関係の昭夫が、いつの間にか写真の片隅に顔を出している、そんな驚きにさわめくほど昭夫の存在は淡かった。(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑩

小泉とし夫

■崇拜者は乃木大将

宮沢賢治の中学時代について、同級生たちの多彩な回想や学籍簿などから、賢治の授業態度やら学業成績などがかなり詳しく証言されている。鉱石採集の趣味に熱中するあまり、学業はあまり良くなかった。

担任からは「色のなまっ白い、ずぼらな、山好き、坊主好きの一風変わった少年」と見みられていた。卒業時の成績は八十八人中六十番。得意なものは国語、作文、博物で三角(数学)は丁、体操は丙、操行点も

丙だった。

賢治は中学時代に百六十首の短歌を作っていて、同級生は賢治の文学好きは知っていた。

さて、昭夫はどうだったのか。賢治とはまるで違い同級生による証言はほとんど皆無に等しい。ふくしのりゆき(『村上昭夫・作品と生涯』)によれば小学校で作文が上手だったと言われるが、中学では文才のてがかりはなく、校友会誌『石椏』の文芸欄に名を連ねたことはなかった。

『石椏』(第四十二号・

空を渡る野犬

凧をふく者は誰だろう
角笛よりも一層深い音の色で
終わりなくふきならす者は誰だろう

無法に殺される総てのいきもの
今こそ空によみがえれ
無法におびえている総てのいきもの
今こそ空に眼を開け

ああ 愛をひきさかれるその苦しみよりも
一層深いまなざしで
びょうびょうと果てなく遠く
凧を吹き続ける者は誰なのだろう

その時数知れぬ野犬のむれは
なだれ始める砂丘の傾斜のように
一斉に空を渡り始めたのだ

(詩集「動物哀歌」より)

昭和十九年)にただ一度、昭夫の名が掲載されたことがある。それは文芸欄ではなく剣道部の活動報告で盛中(現盛岡一高)と対戦した試合の記事だった。

一年生から剣道部員としてけいこに励み、四年のとき、十人チームの一員として中学對抗試合に出場したのでした。結局は6対4で破れた試合だったが、昭夫は先方として四人目に出場し、相手に面をとられ敗退している。

昭夫の学業成績について通覧すれば、得意な学科は武道と修身、苦手なものは外国語と数学だった。国語については五、六〇点くらいの得点で目立つ成績ではなかった。操行にあたる性行評価は、担任が不定だったが、おおむね温順と評された。

入学して間もなく、身上調査票の崇拜する人物欄に、昭夫は乃木大将と書いている。それは昭和十四年という時代に遭遇した少年の、生々しい心のひだをのぞかせるもので、七歳のとき愛宕山の向こうに消えて行く兵隊たちを見た、その夜の影につながるものでした。

(毎週木曜日掲載)